

「鉄山の歩み」(抜粋) 奥泉勝雄

鉄鉱石の発見から奥村鉱業所(常呂鉱山)の時代

常呂町高齢者教室「昭和63年度 オホーツク大学文集 トーコロ」掲載

まず、鉄鉱石の発見は今から50年も以前のこと、昭和14年5月頃です。常呂町にも地下資源として鉄鉱石が発見されたのです。この鉄鉱石の発見者は常呂郡訓子府で柂屋職をしていた中島湧次という方ですが、事の由来を自分史に書き述べてみます。

この方が同年5月10日の夜に夢を見たということなのですが、その夢は太茶苗の神社の裏に鉄鉱石があるという夢であったとのこと。中島さんは太茶苗という地名を知らず、また神社もどこにあるのかも知らず、不思議な夢だなと思いながらも、まず常呂村市街の方々に太茶苗というところ、また神社を知っている方はいないかと聞き歩いている内に知っている人がいて、太茶苗とは旧地名で、今は常呂町日吉であると聞かされたとのこと。なお、神社のことも聞いたところ、それは神社の近くに奥泉さんという方が農業をしているから奥泉さんを訪ねてみなさいということでした。(略)

中島さんらは5人で来たので、まず神社、そして神社の裏を見て帰ると申され、その時私が案内しながら神社の裏へ行ってみたところ、黒い鉱石がごろごろとあり、これはまさに鉄鉱石であると言い、まさにあの夢は神のお告げであると強く信じ、その辺一帯を良く見回り、鉱石を探しておりました。

後で私の方が中島さんのことをお聞きしたところ、昔から中島さんは神仏に親交の深い方であるとのことをお聞きしたのです。

そうして、このような黒い石なら私の裏の沢々に何ヶ所にも転げ落ちていることも話したところ早速そこにも行ってみて、これも鉄鉱に間違いのないと言われ、これは広範囲にあると考えられ、その日は山の沢々を見て帰り、翌日また5人連れで本格的に調査することになりました。(略)

何日か過ぎたある日、大きな大鉱脈を発見して、それからすぐにその鉄鉱石をサンプルにして鉱山局へ持参いたし、良く分析を依頼して調べてもらった結果、このサンプルであれば大変に良質の鉄鉱石であるということでした。

早速、鉱山局から係員数人が来て何日か泊まり込みで山を調査したところ、この鉱脈は転石であるが相当広範囲にあり、なお底深くまで鉱脈があることと申されて帰ることになりました。

帰る時に鉱山局の方が、この鉱山は発展性があると思うので、東京に鉱山ブローカーがいるからその方に照会してあげると言って帰ったのです。

それから数日後、東京のブローカーで奥村弥一郎という方が近日中に山を見せてもらうために行きますという予告があり、中島氏一行は待っていたのです。

当時、戦争中でもあり鉄は戦争の必需品となっていて、奥村氏はそのことも考え合わせ、急いで来ることになったのだと思います。

数日後、奥村弥一郎氏は他に2人を連れて来られ、早速各山々を良く探見され、山の内容を良く調べて、この鉄鉱石は相当量あると考えられ、探鉱または採掘も始めてみようということになりました。早速図面を作り、鉱区面積なども計算の上、採掘をする前で許可

申請書を出願したところ、戦争のため時局が時局だけに鉄が必要とされ、すぐに許可になった。奥村氏はすぐに鉱区税を納め、事務所そして人夫宿舎として飯場も建て、人夫を集める準備をした：（略）お互い了解の上、中島氏は奥村氏へ山の方一切を請け渡すことの本契約を結び、中島氏は約半年ほど鉛鉱石の探鉱を終えて帰ったのです。

それから奥村氏は、本格的に奥村鉱山と称して探鉱及び採掘に取りかかり、人夫を集めました。（略）

なお、奥村鉱山の時は全面的に露天掘りであり、採掘の面ではあまり危険性はないようでした。（略）

いよいよ鉄鉱の搬出の段階となりました。早くから常呂駅の裏に土場を作り、当初は山元から軌道を敷いて運ぶ計画を立てていた。半年ほどもかかったことかと思いますが、軌道線が完成するまではトラックで搬出していたようです。

その後、軌道線も完成した後は、軌道機関車を入れて搬出を始めましたが、機関車から火の粉が飛び散り、山火事が発生したこともありました。山火事が大事にいたっては大変ということからシーゼル貨物車を入れることになりました。このシーゼル車は力も強く、トラックも止めてもっぱらシーゼル車で搬出を続けていたようです。常呂駅土場から国鉄の貨車に積み込み、室蘭の輪西製鉄所まで鉄道輸送をして溶鉱炉に入れ、製鉄にしたのです。

なお、当初は事業所名が奥村鉱業所であったが、搬出を始めた頃から「常呂鉱山」と事業所名称を改めたのです。

＊注：『常呂町百年史』には、「昭和15年6月に東京から坂田海軍中佐、7月に室蘭製鉄所原技師が調査に来常。その結果、奥村弥一郎所有の福山鉱区、針田臺市所有の日吉鉱区を中心に開発が企画され、常呂駅までの軌道敷設、電気施設の整備に取り組まれる。18年10月9日に常呂駅から山元の太茶苗間、約16kmの奥村常呂鉱山軌道が開通し、ここにまず常呂鉱山が操業を開始する。」と記載。

この常呂鉄山の鉄鉱石はマンガン鉄と称していたのです。この鉄鉱石は溶鉱炉に入るとすぐ溶けるのだということでした。単なる鉄鉱石は薬品を別に入れなければ溶けないということなのです。常呂鉱山の鉱石は質も良く、また歩留まり率も良いので東洋一とも言われ、軍の方からも多量に出鉱するようにとの要請があるほど有名な鉄山であったということです。

＊注：『常呂町百年史』には、「各鉱山はいずれも含マンガン赤鉄鉱で、マンガン10%、鉄分40%前後の品位であった。採掘法は露天掘りがとられていた。各鉱山とも運搬上の問題を抱え、常呂鉱山の軌道は8トン車1台、6トン車2台の車輛しかなく、月の積み出し量は3千200トン内外で、滞貨量が多くなっていた」と記載。

従業員は最高にいた時は600人あまりもいて、その内の6割以上朝鮮人であった。日本人は家族連れの方が多く、社宅も足りないようでした。朝鮮人はほとんど単身者が多く、大きな飯場が何棟も建ち、従って社宅・飯場を建てる用地がなくて私の農地も建物用に提供

いたし、鉄山には私も協力いたしました。（略）

昭和20年8月15日に戦争が終戦となり、常呂鉱山は終戦と同時に鉱山業務一切をストップしたのです。（略）

＊注：『常呂町百年史』には、「常呂鉱山は22年まで操業を続け、年生産量3万トンをほこり、従業員・職員³⁹⁰人を擁し、一時は国力鉱山をしのぐ勢いがあった。しかし運送コストで採算がとれぬために、22年末に閉山を決定する。組合員48名による閉山反対ストが23年2月13日から行われ、労使紛争にまで発展したが、やがて妥結をみ、5月5日に正式に閉山となる。以降、鉱区は針田鉱業所に買収される。」と記載。